Osaka University Knowledge Archive

Title	中国新出簡牘学術調査報告 ： 上海・武漢・長沙
Author(s)	中国出土文献研究会
Citation	中国研究集刊. 2012, 55, p. 129-149
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/58669
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

中国研究集刊　創号（総五十五号）平成二十四年十二月　一二九―一四九頁

中国新出簡牘学術調査報告

―上海・武漢・長沙―

中国出土文献研究会

一、学術調査の概要

二〇一二年八月二十七日～九月一日、中国出土文献研究会は、中国上海、湖北省武漢、湖南省長沙において新出簡牘資料の学術調査を行った。

中国では、一九九八年に郭店楚簡の全容が公開され、二〇〇一年からは上博楚簡を分冊方式で公開する『上海博物館蔵戦国楚竹書』の刊行も始まった。さらに近年、里耶秦簡、岳麓書院秦簡、清華大学竹簡、北京大学竹簡などの発見・公開も相次ぎ、出土文献研究は、また新たな飛躍期に入っている。

こうした状況を受け、本研究会では、二〇一二年七月初め、中国への学術調査旅行について次のような計画を立案した。

八月二十七日　関空から上海へ、上海にて研究会開催。

二十八日　午前、上海博物館にて上博楚簡閲覧。午後、上海から武漢へ。

二十九日　午前、湖北省博物館見学。午後、武漢大学簡帛研究中心にて研究会、座談会。

三十日　午前、武漢から長沙へ。午後、岳麓書院にて岳麓秦簡閲覧。

三十一日　午前、湖南省文物考古研究所訪問、馬王堆漢墓跡見学。午後、長沙簡牘博物館訪問。

九月一日　長沙から上海経由で帰国。

参加メンバーは、福田哲之（島根大学教授）、竹田健二（同）、福田一也（大阪大学教務補佐員、大阪教育大学非常勤講師）、白雨田（大阪大学教務補佐員、四天王寺大学非常勤講師）、草野友子（日本学術振興会特別研究員ＰＤ）、金城未来（大阪大学大学院文学研究科博士後期課程院生、日本学術振興会特別研究員ＤＣ２）および筆者（湯浅邦弘［大阪大学教授］）の計七名である。

参加メンバー（馬王堆漢墓跡にて）

計画に基づき、七月十七日、筆者がまず、上海博物館に対して、訪問と上博楚簡閲覧の申請を行った。折り返し、上海博物館から受諾の連絡があり、それを受けて、閲覧を希望する資料について渡航メンバーの意見を集約しつつ、博物館側との折衝を続けた。その結果、八月六日、以下の上博楚簡の閲覧申請について許可の通知が届いた。

『弟子問』（『上海博物館蔵戦国楚竹書』第五分冊所収）、『凡物流形』甲本・乙本、『武王踐阼』（以上、同第七分冊所収）、『成王既邦』、『李頌』、『蘭賦』、『命』、『王居』、『志書乃言』、『有皇将起』（以上、同第八分冊所収）。

これと並行して、武漢、長沙の訪問についても現地との交渉を進めた。その仲介役となったのは、武漢大学簡帛研究中心に留学中の草野友子である。草野は武漢大の陳偉教授に我々の渡航目的と日程を連絡し、訪問および座談会の開催許可を得た。さらに、陳偉教授から、長沙の湖南大学岳麓書院の陳松長教授および湖南省文物考古研究所の張春龍教授に連絡を取っていただき、これによ

り、長沙での旅程もほぼ確定した。

こうして八月二十七日、武漢在住の草野を除く六名が関西空港に集合し、午後便で上海に到着した。そこで草野と合流し、宿泊先の上海新協通国際大酒店の会議室にて、夜八時から十時まで、翌日以降の打ち合わせを兼ねて研究会を行った。発表者は三名。金城未来が「上博楚簡『成王既邦』」について、竹田健二が「竹簡背面に記された劃痕と竹簡の配列」について、福田一也が「上博楚簡『有皇将起』と『鶴鵜』の形制」について、それぞれ発表した。

翌二十八日の九時四十分、上海博物館に到着し、葛亮研究員の出迎えを受け、直ちに地下二階の特別室に招き入れられた。ここで驚いたのは、撮影クルーが待機していたことである。博物館では、開館六十周年の記念映像を制作中とのことで、我々の訪問の様子が収録されることとなったのである。そうした訳で、若干の緊張を強いられたが、先に申請していた通りの上博楚簡が次々にテーブルの上に置かれ、充分に時間をかけて閲覧することができた（上博楚簡実見および葛亮氏との会談の詳細については本稿第二章参照）。閲覧と会談の時間は一時間二十分。その後、メンバーは散会して、博物館内を見学した。ちなみに筆者は、印章、書法、青銅器の各室を約一時間かけて見学した。

昼過ぎ、上海博物館を後にして、上海浦東空港に向かい、そこから武漢に飛んだ。武漢着は午後六時。その日は、夕食をとり、武漢大学付近の易斯特国際酒店に宿泊した。

三日目となる八月二十九日は、まず午前中に湖北省博物館を見学し、昼食後、武漢大学に向かった。簡帛研究中心のご好意により、我々のために会議室を貸していただけることとなり、午後二時から三時二十分まで研究会を行い、草野が上博楚簡『命』について発表した。

そして約束の三時半から、簡帛研究中心の先生方との会談が始まった。同席していただいたのは、李天虹教授、劉国勝教授、宋華強副教授の三名（陳偉教授は長期出張のため不在であるとの連絡を事前に受けていた）。活発な質疑応答が約二時間にわたって行われた。

特に注目されたのは、簡帛研究中心で進められている複数のプロジェクト、二〇一〇年に湖北省で出土した厳倉楚簡の整理状況、その他の新出資料の情報、そして、包山楚簡、北京大学竹簡、上博楚簡、厳倉楚簡などの竹簡背面に見られる「劃痕（かっこん）」「墨線（ぼくせん）」に関する情報である（その詳細については第二章および第三章参照）。

四日目の八月三十日は、午前中に、武漢から長沙へ高

速鉄道で移動した。所要時間は約一時間半。昼食後、宿泊先の瀟湘華天大酒店でチェックインを済ませた後、車で岳麓書院に向かった。今年からの新制度で、民間の車は岳麓書院に直接乗り入れることができず、書院から約一キロ離れた駐車場で、専用のシャトルバスに乗り換えることとなった。

約束の午後三時に書院に到着。陳松長教授の出迎えを受け、まずは書院内を見学した。ここで注目されたのは、正門を入って左手の所に新設された中国書院博物館である。これは、二〇一二年七月にオープンしたばかりの博物館で、中国の書院文化を、様々な資料に加え、タッチパネル式のモニターなども備えて紹介するものであった。一時間ほどの見学を終えた後、博物館二階の一室に招き入れられ、そこで、岳麓秦簡計三十簡を実見し、陳教授と会談した（その詳細については第四章参照）。

最終日となる八月三十一日は、朝九時に湖南省文物考古研究所に向かった。そこで張春龍教授の出迎えを受け、実見を希望する簡牘を尋ねられたので、我々は里耶秦簡と郴州蘇仙橋三国呉簡を要請した。その後、簡牘を収蔵している部屋の隣室に招き入れられ、希望通りに里耶秦簡と三国呉簡を実見することができた。竹簡はガラスケースの中に並べられており、部屋の入り口側に里耶秦簡が九簡、奥側に三国呉簡が十一簡並べられていた（その詳細については第五章参照）。

一時間ほどの訪問を終え、次に馬王堆漢墓跡に向かった。ここは現在、湖南省博物館の管理下にあり、馬王堆三号墓坑をそのまま屋根で覆って展示している施設である。大規模な墓坑を見学して、特に馬王堆漢墓帛書の学術的意義を改めて痛感した。なお、出土品を展示している湖南省博物館は現在改修中のため見学はできなかった。

最後の訪問先となる長沙簡牘博物館に到着したのは、同日の午後二時半であった。二〇〇六年に我々が長沙を訪問した際には、走馬楼三国呉簡十余万枚が出土した上に建つ平和堂デパートの五階の一角が「平和堂出土文物展・三国呉簡陳列室」となっていたが、現在、平和堂にその施設はなく、関係資料はこの長沙簡牘博物館で展示、研究されている。

この博物館は市内中心部の白沙路にあり、二〇〇七年十一月のオープン。国家二級博物館で、長沙市文物局に属している。一九九六年に発見された走馬楼三国呉簡、二〇〇三年に走馬楼の古井戸から出土した西漢簡牘を中心に、出土文物を、年代別・種類別に展示する現代的な

施設である。一階は「三国呉簡」「中国簡牘」「世界文字載体」「中国簡牘書法」などのコーナーからなり、二階は、「長沙出土文物精華展」として、青銅器・陶器・漆器などの展示があり、青銅器の編鐘の演奏実演も特別に披露された。収蔵文物は約三千五百点にのぼるという。

その後、簡牘の整理室に案内され、三国呉簡整理保護項目の責任者である宋少華教授と対面した。ここでは、前記の三国呉簡と西漢簡牘の整理が五名の研究員によって行われており、特に注目されたのは、赤外線カラースキャナを使った西漢簡牘の画像の整理である。西漢簡牘は全体で約一万枚余。内、有字簡が二千枚程度、白簡（文字の記載されていない簡）が八千枚程度。紀年簡（干支の記された簡牘）が約二十枚含まれており、その分析によって、おおむね武帝期のものと推定されている。

この整理室では、二〇一二年に購入したばかりのエプソン製の赤外線カラースキャナを使って、脱水前の簡牘を毎日五～十本ずつスキャンしているとのことであった。スキャナに接続されたパソコンでその様子を拝見したが、画像は極めて鮮明であった。その後、宋教授との質疑応答に入り、簡牘の形制などについて貴重な情報を得ることができた（その詳細については第三章参照）。

こうして全日程を無事終えることができたが、実は、今回の渡航については、若干の不安もあった。まずは、出発日に、史上最大級という台風十五号が沖縄から中国本土に向かいつつあるとの情報があり、予定便が欠航になるのではないかと心配された。しかし、台風は推定進路をそれ、上海にはほぼ定刻に到着することができた。また、領土問題をめぐって近隣諸国との緊張関係が高まっている時期でもあったが、学術調査を目的とする我々の熱意を、どの博物館・大学でも温かく受け止めていただき、極めて丁重な対応をしていただいた。

我々研究会は、二〇〇五年から毎年、中国に渡航し、中国各地の出土文物を実見調査してきているが、今回ほど、多種大量の簡牘を閲覧できたことはない。これまで継続してきた学術交流が大きく実を結びつつあるとの実感を得た。貴重な出土簡牘の閲覧を許可していただき、また、会談に応じていただいた関係各位に心より御礼を申し上げたい。

（湯浅邦弘）

二、上海博物館

二〇一二年八月二十八日、我々一行は上海博物館を訪

問し、収蔵されている戦国時代の楚簡（以下、上博楚簡）の一部を実見した。

実見は、博物館の専門研究員である葛亮氏の立ち会いの下、竹簡の入ったガラス板（或いは厚いアクリル板か？）でできたケースを数個ずつ、順次入れ替えて行われた。ケースの中には、それぞれ十枚程度の竹簡が、白

上海博物館における実見の様子。
左手前の背中の人物が葛亮氏。

い台紙の上に緩やかに固定された状態で並べられている。ケースの中の竹簡の配列は、基本的に『上海博物館蔵戦国楚竹書』によって公表された時点のものである。台紙があるために、竹簡の背面は見ることができないが、竹簡の背面に篇題など文字が記されている場合は、台紙が文字のある部分だけ切り取られている。ケースの裏側から、台紙の切り取られた部分を通して、竹簡背面の文字が見えるようになっているのである。もっとも、竹簡が台紙に固く固定されているわけではないため、竹簡背面の文字のある部分と台紙の切り取られた部分とがずれてしまい、文字を見ることができないこともある。今回実見した中では『命』の篇題がそうだった。

実見に際して我々は、あらかじめ準備した質問に加えて、実見中に気付いた点についても葛氏に質問した。葛氏はそれらに対していずれも丁寧に回答してくださった（写真参照。左手前の背中が葛亮氏）。葛氏との問答を含めて、筆者（竹田）に特に興味深く思われた点を以下にいくつか紹介する。

まず第一に、今回の実見において、『凡物流形』乙本第一簡の背面に、「陰陽」という文字が記されているのを確認することができた。葛氏によれば、『凡物流形』の最初の整理者は李零氏であり、その李氏による最初の

段階の整理では、この文献の篇題は「陰陽」とされていたのだが、後に整理者が交替して変更された、とのことである。

第七分冊に収められている『凡物流形』の最終的な整理者は、曹錦炎氏である。『凡物流形』甲本の第三簡背面に「凡物流形」の四文字が記されており、この四文字は第一簡冒頭の字句と一致している。曹氏は、文献全体の冒頭に位置する四文字が第三簡の背面に記されていると見なして、「凡物流形」を篇題とした。『上海博物館蔵戦国楚竹書』第七分冊には、「凡物流形」の四文字が記されている第三簡背面の写真も収録されている。しかし、乙本第一簡の背面に「陰陽」の二文字が記されていたことについては、曹氏の釈文においてはまったく言及がない。また、その写真も公表されていない。

葛氏によれば、『命』や『成王既邦』についても、当初は李零氏が整理を担当していたとのことである。上海博物館が上博楚簡を入手した一九九四年から今日まで、すでに二十年近く経過していることを思うと、整理者の交替自体はさほど驚くべきことではないと思われる。しかし、最初の整理者が竹簡背面の文字に気付き、しかもそれを一旦は篇題と見なしていたにもかかわらず、最終的な釈文においてそうした情報がまったく無視されているのは、整理全体として見た場合にやはり問題があるように思われた。

第二に、上海博物館の所蔵する戦国楚簡の背面の劃痕に関する情報である。劃痕とは、竹簡の背面に記されたひっかき傷状の斜線のことである。二〇〇九年に北京大学が収蔵した漢簡の背面にあるものを孫沛陽氏が発見し

上海博物館における実見の様子

たことをきっかけに、竹簡の配列を復元する手掛かりとして注目されている。

なお、竹簡の背面には、墨筆による斜線（墨線）が記されている場合もある。上博楚簡の中では、『命』の篇題（第十一簡背面）の上部にある右下がりの斜線などがこれに当たる。

上博楚簡の背面にも劃痕の存在するものがあるとの情報（北京大学出土文献研究所「北京大学蔵西漢竹書概説」〔『文物』二〇一一年第六期所収〕など）を踏まえて、葛氏に劃痕に関する情報を教えて欲しいと求めた。これに対して葛氏は、「劃痕の存在が分かった当初は、劃痕が竹簡の配列を復原する決め手になると思った。しかし、劃痕には連続したものもあれば、断裂したものもあり、反対方向のものもあれば、間隔のあるものもある。現在は劃痕の情況は非常に複雑であると考えている。上博楚簡の篇題のあるほとんどの竹簡においては、篇題の上、或いは下に、劃痕や墨線が認められる。清華大学の戦国簡や北京大学の漢簡の劃痕についての分析を踏まえると、上博楚簡の篇題のある竹簡には長い劃痕があるかもしれないが、詳しいことは分からない」と回答された。

前述の通り、現在上博楚簡は、台紙ごとケースに収められている。葛氏によると、今直ちにケースを開けて竹簡の背面の情況を確認することや、写真を撮影することはできない。上海博物館が戦国楚簡を入手した時点で、すべての竹簡の背面の写真を撮影したわけではないそうであるから、現在上博楚簡の竹簡でその背面の情況を確認することができるものは、基本的には竹簡の正面と背面との両面に文字がある竹簡だけである。先に述べたように、『凡物流形』乙本第一簡の背面に「陰陽」と記されていたことが従来公表されていなかったことも、上海博物館や整理者の多くが、竹簡の背面に関して十分には注意を払ってこなかったことを示すと思われる。

葛氏はそのことを認めた上で、『上海博物館蔵戦国楚竹書』に関する当初の出版計画がすべて完了した後には、改めて竹簡の現状の写真をすべて撮影したい、赤外線写真や赤外線スキャナーは発熱がひどく、処理の際に高温になることを心配している、と発言された。

第三に、清華簡の背面に、竹簡の番号を示す数字が記されているものがあることに関連して、上博楚簡にもそうした竹簡があるかと質問したところ、葛氏は、そうした竹簡はない、と否定された。

但し、上博楚簡の中には、竹簡正面の右下に小さく

「一二三四…」と順番に数字が記されているものがあるそうである。それは占卜関係の文献の竹簡で、その文献は第九分冊に収録される予定であるとのことであった。

これまで上博楚簡は、整理作業の進展とともに順次公開されてきた。しかし、上海博物館がこの戦国楚簡を入手してから今日までの間に、新たな出土資料も相次いで出現し、出土文献に関する研究は大いに進展した。また、赤外線スキャナーといった新たな機器を整理作業に導入することも進みつつある。

実見後の記念撮影。前列右から二人目が葛亮氏。

上博楚簡については、何よりもまずその全容が早く公開されることを期待したいが、その次の段階として、これまでの研究の蓄積を踏まえて上博楚簡全体を改めて見直す作業が必要であると痛感した。葛氏は、約二十年前に上博楚簡の処理を担った世代ではない。その葛氏も、自らの次の段階の仕事として、これまでの研究成果を全体的にまとめて整理することである、との認識を示されていた。

なお、葛氏によれば、現在第八分冊まで刊行されている『上海博物館蔵戦国楚竹書』は、今後さらに二冊、或いは三冊刊行され、その最後の一冊には断簡が含まれる可能性があるとのことである。上博楚簡ができるだけ早く、残簡も含めてすべて公開されることを強く希望したい。

最後に、本稿の目的からは逸脱するのであるが、『李頌』に関連して述べておきたいことがある。

筆者は、二〇一二年年五月二十五日に東京で開催された第四回日中学者中国古代史論壇において「上博楚簡『李頌』の文献的性格」と題する発表を行い、会議論文

集に原稿を発表した。その中で筆者は、『李頌』の整理者である曹錦炎氏が、断裂した竹簡の上半部と下半部とを綴合して第一簡を整簡に復元していることについて、この綴合には問題があり、成り立たないと指摘した。その根拠は、『上海博物館蔵戦国楚竹書』の写真を見る限り、第一簡上半部の断裂箇所の鋸歯状に突き出ている部分の先端に、複数の黒い部分が存在することである。

筆者は写真に見えるその黒い部分は何らかの文字の痕跡である可能性が高いと推測したのであるが、発表の後、右の筆者の指摘は根拠が不十分であると判断するに至ったため、撤回する。

今回の実見で『李頌』第一簡を子細に観察したところ、第一簡上半部の断裂箇所に、文字の痕跡と見られるような黒い部分はほとんど認められなかった。実物と写真とが異なるように見えた理由については不明である。

（竹田健二）

三、武漢大学簡帛研究中心・長沙簡牘博物館

八月二十九日、我々一行は、武漢大学簡帛研究中心を訪問し、李天虹教授・劉国勝教授・宋華強副教授との座談会を行った。

まず簡帛研究中心が現在取り組んでいる研究プロジェクトについて尋ねたところ、以下の三つとの回答であった。第一に、当日不在でお会いできなかった陳偉教授を中心とする、秦簡の総合研究である。これは、発表済みの秦簡の研究成果を集めて整理し、赤外線写真の撮影を含めた竹簡の図版の整理を行うものである。第二に、李

武漢大学簡帛研究中心の会議室にて

天虹教授を中心とする、湖北省から出土した未公開の五種類の楚簡（江陵藤店・老河口市安崗・江陵磚瓦廠・江夏丁家咀・荊門厳倉から出土したもの。内容は遣策と占卜関係）の整理である。第三に、新聞出版総署の「中華字庫」プロジェクトである。これは、中国の古代から清代までの漢字や少数民族の文字をすべてデジタル化するもので、簡帛研究中心は主に秦代の簡牘の文字について担当する。三つのプロジェクトは、いずれも簡帛研究中心が団体として参加するものであり、それぞれの教員はこれらとは別に、個人として取り組むプロジェクトや研究課題があるため、皆とても忙しい、とのことであった。

続けて、李教授を中心としている厳倉楚簡の整理の進捗状況について質問した。李教授は、「二〇一〇年に出土した厳倉楚簡については、出土した時点で竹簡の写真を現場で撮影し、簡単な釈文を作成した。現在は写真に基づいて釈文の修正を進めるとともに、赤外線写真の撮影を行っている。整理作業の終了時期はは二〇一三年の年末の予定である。厳倉楚簡はすべて残簡で、完簡はなく、復元はほぼ不可能である。全体の文字量は二百字程度、簡長は六十～七十cm、盗掘を受けているため他に出土した器物はない。厳倉楚簡は墓主が確定されており、墓主は「悼滑」である、この人物については伝世文献にも記載がある。墓主が判明することは珍しい」と回答された。

また、中国各地では近年も出土が続いているのかと質問したところ、「最近荊州から数枚の楚簡（内容は文書）が出土した。湖北省では他にも未発表の出土資料がある。それらについて考古的調査は行っているが、出版には至っていない。七〇年代に出土した藤店の竹簡は肉眼では文字を読み取ることができないが、赤外線ではよく見えた」との回答があった。

さらに我々は、劃痕に関して意見をうかがった。これに対する李教授の回答は、以下の通りである。

最も古くには、包山楚簡の報告書に劃痕に関する言及がある。或る劃痕は竹簡の配列を示す手がかりになるように思われるが、必ずしもすべての劃痕がそうではないため、これまでほとんど注目されることがなく、写真もほとんど残されなかった。上博楚簡にも劃痕はあるかも知れないが、当初はその存在に気付かなかったため、写真はない。脱水後は劃痕が判別しにくくなった。厳倉楚簡にも劃痕のような線が見えたが、鮮明な写真を撮ることができず、さほど注目してはいなかった。二〇一一年に再度調査し、竹簡の背面を赤外線で写真撮影した結

果、劃痕のあるものが十～二十枚確認できた。しかし、厳倉楚簡は残欠が激しく、竹簡の配列を復元することは困難である。

二〇一〇年に『清華大学蔵戦国竹簡（一）』が刊行され、竹簡背面の写真がすべて公開された。当初は清華大学も竹簡背面の竹簡番号（ノンブルに当たるもの）だけに注目しており、劃痕には注目していなかったようだ。私（李）は竹簡背面の写真を見て、竹簡背面の線の重要性に改めて気付いて、簡帛網に小さなニュースを発表した。その後二〇一一年に清華大で竹簡の形制に関する報告をした際、その文章の中で劃痕に触れた（清華大学出土文献与保護中心主催の「清華大学蔵戦国竹簡（壹）国際学術研討会」を指す。二〇一一年六月二十九日）。その発表に対する反応はかなり良かった。この清華大での会議で、多くの人が劃痕の問題に興味を持ったようである。北大簡の劃痕については、その後孫沛陽氏が、未発表の資料に基づくものであるが、論文を発表した（「簡冊背劃線初探」を指す。『出土文献与古文字研究』第四輯所収、二〇一一年十二月）。私も劃線についての論文「湖北出土楚簡（五種）格式初析」（『江漢考古』二〇一一年第四期（総第一二一期）、二〇一一年十二月）を発表した。

岳麓書院蔵の秦簡の背面にも劃痕はあり、こうした劃痕について学界では、劃痕は編連のためであり、竹簡の配列の復元に役立つという見方が主流であるが、私は劃痕についてまだはっきりしたことを確定することはできないと考えている。劃痕が参考になることは間違いないが、竹簡の編連と直接的な関連を持つものであるかどうかについては、疑問を感じている。今後劃痕と関連のある竹簡背面の写真はすべて公開されるようになるであろうから、将来、十分な資料に基づいて、自然に結論が出てくるのではないか。現在は、急いで結論を出すべきではないと考える。

以上の李教授の回答に続き、劉教授が李教授の意見に賛成する立場から、劃痕に関する問題は、まず第一に竹簡の編連との先後関係についてであり、第二に誰が劃痕を残したのかという点についてであるとし、包山楚簡の大部分（二～三枚を除く）には劃痕はなく、郭店楚簡にも無いと指摘した。

宋副教授も、劃痕の作者は誰か、その目的は何かという点が問題である、劃痕は文献の形成に関わる重要な情報であると思うが、この問題の解明には更なる資料が必要である、劃痕による竹簡の配列の復元について過大に評価することはできない、自分は北大漢簡を見たことが

あるが、劃痕のあるものもあり、ないものもある、竹簡の編連を文字を根拠として行った場合、正面の文字と背面の劃痕との対応が良くないことがある、と述べられた。

なお、この二日後の八月三十一日、我々一行は長沙簡牘博物館において、赤外線スキャンした画像の処理をパソコンで行っている作業や釈文作成作業の見学を行った。この時我々に対応してくださったのは元館長の宋少華教授である。我々は宋教授にも劃痕に関する質問をして、回答を得たので、紹介しておく。

宋教授に対する質問は、長沙簡牘博物館が行っている簡牘の撮影や釈文作成においても劃痕に注目している

武漢大学簡帛研究中心のある建物の前にて

長沙簡牘博物館の整理室にて。左から三人目が宋少華教授。

か、というものであった。これに対する宋教授の回答は以下の通りである。

すでに我々は簡牘の背面にある文字以外の情報についても注意して観察しており、昨年考古研究所が発掘した後漢の竹簡の背面に劃痕があることを確認した。竹簡の状況から、まず書写が行われていない竹簡を配列して、その竹簡の背面に線を記した後、次いで書写を行い、続いて竹簡の編聯を行った、と考えている。但し、清華簡の場合は竹簡背面に線が記されているが、この後漢の竹簡の場合は、竹簡背面の表面がナイフなどの何か堅いもので傷つけられていた。なお、木牘についてもその背面に線がある場合があり、劃痕に基づいてそれの配列を復原することができる。そうした現象は、長沙簡牘博物館が所蔵する三国呉簡と漢簡とには見られないが、編聯された行政文書の木牘数枚の背面に、劃痕がクロスして記されているものを見たことがある。

前章で述べた上海博物館に加えて、この武漢大学簡帛研究中心や長沙簡牘博物館での調査により、我々は劃痕に関する研究の情況について、大いに理解を深めることができた。二〇〇九年に北京大学が入手した漢簡において劃痕が発見されたことや、二〇一〇年に刊行された『清華大学蔵戦国竹簡（一）』に竹簡背面の写真が収録されたことなどを契機として、出土文献の研究に携わる研究者の間で劃痕に対する関心が急速に高まり、その研究が進み始めているのである。もっとも、李教授が指摘する通り、北京大学の漢簡をはじめ、劃痕に関する重要な資料は、ほとんどがまだ公開されていないのが実情である。このため、劃痕とはそもそも如何なるものかといった基礎的な点を含めて、研究者の間で認識が十分共有されるに至っていないように思われる。

果たして劃痕は、出土した簡牘の配列の問題を解明する手掛かりとして有効なのか。有効であるとするならば、どの程度有効なのか。こうした点は、今後出土文献研究において大いに注目される研究課題の一つといえよう。

（竹田健二）

四、岳麓秦簡

八月三十日午後、岳麓書院に向かい、陳松長教授の出迎えを受けた。はじめに書院内の各施設とオープンしたばかりの中国書院博物館を見学し、その後、特別室に招かれ、約一時間、岳麓秦簡を閲覧しつつ、陳教授（写真左端）と会談した。

岳麓書院における竹簡の実見と会談

まず、竹簡の保存状況であるが、専用箱に十五本ずつ、それぞれ脱水済みの竹簡一枚ずつをガラス板で挟んで保存してあり、上部にはそれぞれ五桁の整理番号が付されていた。番号は連番ではなかったが、これは、初期段階の整理番号で、分類後のものではないからとのことである。

箱から出された竹簡がテーブルの上に並べられ、白手袋をつけて一本ずつ手に取ることを許された。竹簡背面も確認できるため、非常によい保存方法であると思われた。我々は、これを二セット、計三十本実見した。内、木簡が二本含まれていた。脱水後の竹簡の状態は概ね良好で、字跡も鮮明に見える。写真は、脱水処理前のもの、赤外線スキャンしたものもあるが、字跡は、脱水後の竹簡が一番よく見えるとのことである。

内容は、未公開の簡牘で、主として第三分冊以降に収録を予定している法律関係文書および数書とのことであった。そこで、岳麓秦簡の基礎的情報を確認しておきたい。

岳麓秦簡は、二〇〇七年十二月、湖南大学岳麓書院が香港に流出していた秦簡（出土地不明）を緊急購入したもので、大小八箱に入っていた竹簡はラップで包まれていた。その総数は、二一〇〇枚（ほぼ完整なものは一三〇〇余枚）とされる。また、二〇〇八年八月、香港の収蔵家が購得していた竹簡七十六枚（ほぼ完整なものは三十余枚）が岳麓書院に寄贈された。これにより、岳麓秦簡の総数は二一七六簡となった。岳麓書院が購入した竹簡と、収蔵家が寄贈した竹簡は、形制や書体・内容などが非常に類似しており、同一の出土簡であろうと考えられている。大半は、竹簡であるが、三十余枚の木簡もある。竹簡の形制は三種に大別される。簡長は、①三十cm前後、②二十七cm前後、③二十五cm前後。幅は五～八mm。編綫は二種で、三道編綫のものと、両道編綫のものがある。編綫痕と文字との関係から、①筆写した後に

編輯したもの、②先に編輯してから筆写したもの、に大別される。

筆写時期については、『質日』（暦譜）に、「秦始皇二十七年」、「三十四年」、「三十五年」という紀年が認められる。よって、成書年代の下限は、始皇帝三十五（前二一二）年頃と推測される。

雲夢睡虎地秦簡と類似した秦の律令や役人のための手引き書が含まれていることから、岳麓秦簡の墓主についても、治獄にたずさわった人物であった可能性が指摘されている。

基礎整理の結果、岳麓秦簡は次の七部に大別された。

（一）『質日』
（二）『為吏治官及黔首』
（三）『占夢書』
（四）『数』書
（五）『奏讞書』
（六）『秦律雑抄』
（七）『秦令雑抄』

このうち、『質日』『為吏治官及黔首』『数』書は竹簡背面に篇題があり、その他は編者による仮題である。

すでに二〇一〇年十二月、朱漢民・陳松長主編『岳麓書院蔵秦簡［壹］』（上海辞書出版社）が刊行され、岳麓秦簡の内、『質日』『為吏治官及黔首』『占夢書』の三文献に関する図版（カラー・赤外線図版）・釈文が公開された。また、二〇一一年十一月には、同第二分冊が刊行され、『数』書が掲載された。

我々が閲覧したのは、これらに続く第三分冊以降に収録予定の未公開簡牘であった。至近距離で閲覧できたので、第一分冊の説明にもあった、いわゆる秦隷の字体も確認できた。

次に、質疑応答に移り、まず「劃痕」について質問した。北京大学竹簡、上博楚簡などでは、竹簡背面の「劃痕」「墨線」が竹簡配列の有力な手がかりとして注目されているが、岳麓秦簡ではどうなのか。これについて陳教授は、実は、第一分冊刊行の時点では、そのことにまだ充分な認識がなく、第二分冊の編集段階でその重要性に気づいたとのことであった。岳麓書院では、脱水前の写真も撮影済みであり、背面の情報にも充分に留意しながら刊行していくという。なお、『岳麓書院蔵秦簡』の第三分冊は二〇一三年の前半に刊行を予定しており、全体では、五～六分冊になるとのことであった。

また、一枚の竹簡の背面に複数の劃痕が付いている現象について竹田健二が質問したところ、竹簡背面の線が

すべて劃痕であるとは限らない、また、劃痕はあくまでも竹簡配列の参考とすべきものであり、劃痕だけで竹簡の連接を決定することはできない、との回答を得た。

続いて、筆者（湯浅）は、岳麓秦簡の中で段組筆写が見られる特異な文献として『占夢書』に注目しているので、特にこれを取り上げて質問した。

『占夢書』は、竹簡四十八枚。簡長約三十cm。三道編綫。筆写方式には二種があり、①分段筆写しないもの（満写簡）六枚。内容は、陰陽五行学説による占夢理論を説く。②二段筆写で、夢象と占断を記すもの、とからなる。

陳松長教授は、『岳麓書院蔵秦簡〔壹〕』において、この『占夢書』を、現時点では最古の占夢書文献であると評価している。ただ、若干の疑問もあるので、次の四点について質問し、それぞれ以下のような回答を得た。

①『占夢書』は文脈をとりづらい部分もあるが、竹簡背面に劃痕は認められたのか。またそれを手がかりとして配列を決めたのか。→劃痕は認められなかった。敦煌本『解夢書』が天地人の配列になっていることを参考にし、内容に基づく配列を行った。

②分段筆写していない竹簡五枚を先に配列し、二段組で筆写している竹簡を後に配列しているが、これが逆転する可能性はないか。→その可能性もある。分段筆写していない五本の竹簡を先に置けば、序（概説）に相当し、後に置くと結論（総括）ということになるが、中国の文書の慣例からすると、序である可能性が高いだろう。

③二段組の竹簡は、まず上段を右から左に読み、その後、下段を右から左に読むという理解で良いか。→概ねその可能性が高い。一本の竹簡を上から下へ読むと読みにくいところがある。ただ、上段を先に読み、下段に移るというように読んでも、問題があるところがある。確定できない部分が残る。

④二段組みの竹簡部分の配列は天地人の分類に基づくとのことであるが、天地人の分類・配列が明確に表れてくるのは、魏晋以降に誕生する「類書」においてである。秦簡の段階でもすでに明確な天地人の分類・配列があったと考えても良いか。→今回は、天地人の分類・配列を原則とする敦煌本『解夢書』などを参考に配列したもので、秦の時代に明確な天地人の配列があったかどうかは分からない。

このように、『占夢書』については、なお未確定な部分も残るようであるが、竹簡の整理・釈読に当たられた陳松長教授のご苦労は相当なものであったと推測さ

れた。

今後、背面の情報にも留意しつつ、竹簡の配列が検討され、より精度の高い釈文が提供されるであろうと感じた。

（湯浅邦弘）

五、湖南省文物考古研究所

八月三十一日午前九時、湖南省文物考古研究所に到着し、張春龍先生の出迎えを受けた。張先生にお目にかかるのは、二〇〇六年九月に戦国楚簡研究会（当時）の中国湖南省長沙学術調査で同研究所を訪問し、里耶秦簡と慈利楚簡を実見させていただいて以来六年ぶりであった（『中国研究集刊』第四十一号〈二〇〇六年十二月〉所収「中国湖南省長沙学術調査報告」参照）。今回の訪問は、里耶秦簡の正式報告書の第一分冊にあたる『里耶秦簡〔壹〕』（二〇一二年一月）の刊行をうけて、新たな里耶秦簡の実見と学術情報の収集が主たる目的であったが、幸い同研究所が保管する郴州蘇仙橋三国呉簡もあわせて拝見させていただくことができた。

まず里耶秦簡から報告する。実見したのは九点で、編号と形態は以下の通りである。

7-1　木牘〈裏面〉
7-2　木牘〈表面〉
7-41　木簡
7-66　検
7-96　木簡
8-62　木牘〈表面〉
8-163　木牘〈表面〉
8-195（197）木牘〈表面〉
8-284　楬

これらはいずれもガラス板に挟んだ状態で透明な袋のなかに入れられ、ガラス板の下部中央に手書きで編号が記されていた（写真1）。こうした保存方法について張先生は次のように説明してくださった。

里耶秦簡は出土後、脱水処理を施したが、脱水技術は優れていて、収縮や変形は生じていない。ここに並べてある閲覧用の簡牘は湿気を吸収して変形することを防ぐためにガラス板で挟み、透明な袋の中に入れて窒素ガスを充填している。袋の上部にある赤い錠剤は、窒素が袋から抜けて空気が入り込むと青色に変わる。そうなると窒素を入れ直さなければならない。奈良文化財研究所と交流があり、保存材料は三菱のものを使っている。

また各簡に付された編号は出土時の整理番号で、最初の7や8の数字は古井戸から出土した際の層位を示し、8の番号をもつ第八層出土の四簡はすでに『里耶秦簡〔壹〕』（文物出版社、二〇一二年一月）に収録されて公表済み、7の番号をもつ第七層出土の五簡は未公表とのことであった（『里耶秦簡〔壹〕』の「凡例」によれば第七層出土簡牘は第三輯に収録予定）。なお張先生はガラス板に手書きされた編号について、これは最初に記入されたもので最終的な報告書と一部合致していないものもあると付け加えられたが、帰国後にあらためて照合したところ、8-195の簡は『里耶秦簡〔壹〕』では8-197の編号が付されており、張先生が言われた編号調整の例であることが確認された。

さらに近年その存在が注目されている簡牘背面の劃痕・墨線については、里耶秦簡の大部分は行政文書でおおむね文章が短く、一枚の木牘が一件の文書であるため、そうした線は確認されていないとのことであった。

先に述べたように湖南省文物考古研究所での里耶秦簡の実見は二回目であり、前回は表裏に書写された公文書木牘が中心であったが、今回は同種の木牘とともに楬（文書楬）8-284や検（郵行文書）7-66、券書7-41・7-96など多様な木簡が展示されており、未公表の資料も含めて、選定にかかわるご配慮をありがたく感じた。これら各種の木簡について張先生は、例えば「屋根型の形態をもつ木簡は帳簿で、真ん中で分割しているが完全には切り離さず、年月日・担当者・お金・食料の数などの記録にあわせて刻歯したのちに両面を分割する」などと木簡に見立てた紙を使って懇切に説明してくださった（写真2）。資料を実見しながら、楬や検などの用途にも話がおよび、木簡ならではの多様な形態と機能について理解を深めることができた。

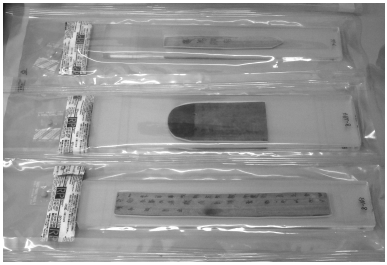

写真1

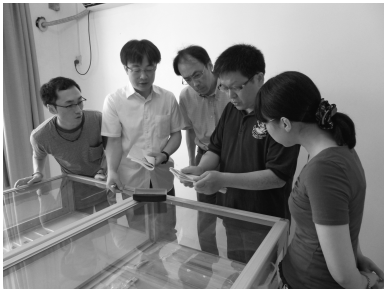

写真2

次に郴州蘇仙橋三国呉簡（以下、郴州呉簡と略記）の

報告に移ろう。実見したのは十一点で、編号は以下の通りである。

V-61
V-62
V-63・104・118（綴合）
V-64・69（綴合）
V-66
V-68
V-80
V-84
V-90
V-119・123（綴合）
V-139

編号が並記されているのは複数の残簡の綴合であることを示し、冒頭のローマ数字Vは「呉簡」の略号。各簡はそれぞれの形に応じてくり抜かれた透明な板に挟んで密封され、下部中央に手書きで編号が記されていた。

はじめに張先生の説明を踏まえて概要をまとめておく。

郴州呉簡は、二〇〇三年に長沙市南四〇〇kmに位置する湖南省郴州市蘇仙橋一建設工地で発見された、漢代から宋元時期までの十一座の古井戸のうちの四号古井（J4）より出土した一四〇点の木簡である。なお同地の一〇号古井（J10）からは西晋木簡九四〇枚余も出土している。この郴州呉簡の全ての図版と釈文は、すでに湖南省文物考古研究所・郴州市文物処「湖南郴州蘇仙橋J4三国呉簡」（『出土文献研究』第七輯、二〇〇五年）に公表済みであり、さらに湖南省文物考古研究所・郴州市文物処「湖南郴州蘇仙橋遺址発掘簡報」（『湖南考古輯刊』第八集、二〇〇九年）には、段国慶氏による八点の綴合が示されている（今回実見した中の三点の綴合も含まれる）。簡文に見える紀年は呉の孫権の赤烏二年（二三九）から赤烏六年（二四三）までの範囲に限られることから、年代は三世紀前半と推定され、内容は簿籍・書信・記事・習字などで構成されるが大部分は残簡もしくは削衣で、一部に焼け焦げた簡もみられることから、不用の残簡を井戸に廃棄したものと推測されている。

これらは言うまでもなく呉の孫権時期における社会状況をうかがう上での貴重な資料であるが、同時に書法史の面からも、生成期の楷書の実態を示す資料として重視される。一九九六年に湖南省長沙走馬楼から出土した走馬楼三国呉簡は、およそ十万点という豊富な資料を提供

し、三世紀前半の筆記文字の実態がかなり詳細に明らかになってきている。中でも特記されるのは木簡の文字の一部に楷書の特色である起筆―送筆―収筆の三節構造が明瞭に認められ、楷書の発生時期が三世紀前半に溯ることが実証された点である。そして走馬楼三国呉簡とほぼ同時期の資料であるこの郴州呉簡にも明瞭な三節構造をもつ文字が含まれており、当時の筆記文字の実態把握がさらに進展することとなった。今回実見した木簡では、V-84の冒頭の「書」字の横画に三節構造が認められ、生成期の楷書の息づかいを詳細に観察することができた（写真3）。

写真3

なお一〇号古井（J10）から出土した西晋木簡については、前掲「湖南郴州蘇仙橋遺址発掘簡報」に五十一簡の図版が収録されているが、全容はなお未公表のようである。一方、東漢簡牘については、すでに報告書が刊行されている二〇〇四年出土の東牌楼東漢簡牘に加え、近年新たに長沙市内の地下鉄「五一広場駅」の工事現場から約一万枚に上る東漢期の紀年をもつ簡牘が出土し、現在整理が進行中である。これらの資料が公表されれば、漢代から三国時期を経て晋代に至る筆記文字の実態を、大量の同時代資料によって把握することが可能となり、書体変遷の過程がさらに具体的に解明されるであろう。

以上が湖南省文物考古研究所訪問の概要である。最後に張春龍先生をはじめとする同研究所のご高配と懇切なるご教示に対し、あらためて深甚なる謝意を表したい。

（福田哲之）